5　まとめ

我が国の「倭国名」研究は、今もって、中国正史の”管理下”にあると言えよう。
『後漢書』が「台」と言えば「台」となり、『紹熙本』が「壱」と言えば「壱」となり、『御覧魏志』が「台」と言えば「台」となる。

内藤湖南：邪馬壱は邪馬台の訛なること言ふまでもなし。『梁書』『北史』『隋書』皆台に作れり。
古田武彦：「邪馬壱」の壱は中国天子に対する二心なき忠節という特別な字義だ。

全ての研究者は、「台」か「壱」かのどちらかを選択し、その正当性、その唯一性、その絶対性を主張する。だが、このような本質以前にそれぞれは実在する。実在とその実在理由を相対的に研究することが必要と思われる。

「倭」

中国正史に最初に現れるのは「倭人」である。後漢の班固の撰んだ『前漢書』に次のように書かれている。

楽浪海中倭人あり。分かれて百余国となる。歳時を以て来り献見すという

「倭人」は中国語である。何故、「倭人」となったのであろうか。
その後の正史は、この「倭」を継承して、「倭人」「倭国」と表記する。「倭」は班固が勝手に作った言葉ではないと思われる。「倭人」と書く根拠があったはずである。それに関しては諸説ある。いずれにしても、当時の我が国からの使節が語った日本語によると考えられる。
漢は、当然、国の名を聞いたに違いない。漢は我が国の使節が言った国名を以て、「倭」と表記したと考えるのが最も妥当である。

では、その日本語音として、「倭」はふさわしかったのだろうか。「倭」は中国語では「非常に小さい」という意味である。「倭国」は小国、「倭人」はチビという意味となる。
「倭」は我が国の使節が言った日本語音の漢字表記だとして、それがふさわしいかどうかといえば、ふさわしくない。誰でもそう考えるであろう。では、いかなる漢字が適当なのか。

その前に、我が国の使節は日本語で何と言ったのか。国名を何と言ったのか。つまり、前漢に使節を送った国は、どの国だったのか。
まず、考えられるのは、「姫」である。この推測には根拠がないことはない。

卑弥呼連邦２２国の中に「鬼国」がある。「鬼国」の成立は紀元前５世紀、呉の王家一族「姫氏」による建国である。本来は「鬼国」ではなく「姫国」である。この「姫国」が倭国（３０連邦）の始原の国である。使節を送ったとすれば、この姫氏の国が第一候補である。
「姫国」が前漢に使節を送った。当然、「姫」と名乗った。前漢はそれを聞いて、「姫人」と表記しなかった。「倭人」と表記した。このように考えることができないであろうか。
「漢への使節は姫の人である」という認識に立てば、「倭人」とは「姫人」である。日本語としてふさわしいのは、「倭人」ではなく、「姫人」である。「姫」は「紀」として、例えば「紀州」「紀貫之」として今日まで伝わり、「姫氏」は、例えば「岸」「吉志」「喜志」として今でも人名、地名として存在する。
だが、漢が「姫を聞いて倭とした」と、想定するのは、二つの音がかなり似通っていなければなら

ない。「倭」は「ゐ」に近いと言われるが、「姫」は「ゐ」の音とはかなり異なると思われる。前漢へ使節を送った国は「姫国」ではないかもしれない。

別の史料から考えてみよう。『後漢書』倭伝は次のように書いている。

建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自称大夫倭国之極南界也光武賜以印綬

建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南の界なり。光武、印綬を以て賜う。

ここには後漢に朝賀使を送った国の名がはっきり記されている。「倭奴国」である。
光武帝はこの国の使者に金印を与えた。建武二年(57年)である。この金印は、江戸天明年間、志賀島(福岡市東区)で発見された金印であるとされている。
印文は、陰刻印章(文字が白く出る逆さ彫り)で、3行に分けて篆書で、「漢〈改行〉 委奴〈改行〉 國王」と刻されている。印文では「倭奴」ではなく「委奴」である。

唐の陸徳明の『経典釈文』にも、「倭もとまた委に作る」とある。

『魏志倭人伝』石原道博編訳

『後漢書』「倭奴」と印文「委奴」は同じと考えられる。後漢に朝賀使を送った国「倭奴国」とは「委奴国」と考えてよいであろう。
『東夷伝』は「倭国」と「倭奴国」を区別している。「倭奴国は倭国の一つである」と認識している。では、「倭国の極南の界である」という「倭奴国」とはどこか。
陳寿(233年 ~ 297年)の認識は、倭国30国に及んでいた。北は「狗邪韓国」から南の境界「狗奴国」までが倭国だと知っていた。陳寿の「極南の界」は「狗奴国」である。
『後漢書』の「倭国の極南の界」である「倭奴国」と陳寿の「狗奴国」とは明らかに異なる。二つは別国である。

57年の後漢の「倭奴国」とはどこか。
『後漢書』「倭奴国」と印文「委奴国」は同じ国であれば特定できる。
「姫氏」二代目の王「順」は「姫国」を出て新たな国を作ったと言われる。その国が「委奴国」である。倭国の中で二番目の国で、吉野ヶ里遺跡が「順」の国である。「委奴国」「倭奴国」は吉野ヶ里である。

陳寿は『倭人伝』において、「委奴国」を「伊都国」と表記している。同じ国であるが、その場所は異なる。印文「委奴国」は吉野ヶ里、『倭人伝』「伊都国」は佐賀市である。理由は遷都であろう。57年の「委奴国」は、三世紀、卑弥呼の時代には佐賀市に移転していたのである。
印文「(漢)委奴國王」と「伊都国王」は同じ王家である。陳寿は「伊都国には代々王が居る」と書き、それを裏付けるように、吉野ヶ里遺跡では甕棺に納められた王墓が発見されている。

漢に朝賀使を送った国は、「姫国」ではなく、印文の「委奴国」だった。このように考える。
漢の倭国認識が「北は狗邪韓国、南は委奴国」だったとしたら、「極南の界」は「委奴国」となる。
「委奴国(吉野ヶ里遺跡)」は有明海からかなり北上した高台にある。この地は縄文時代、海の下ではない。「委奴国」の「奴」は、陳寿が表記した「奴国」「狗奴国」などの「奴」の用法、「水が引いて土(奴)となった」という「土」の借字用法ではないと思われる。
陳寿は「伊都国」と書いている。「奴」を「都」に変換している。つまり、「伊都」とは「伊の都という意味だ」と陳寿は認識していたと思える。
「伊都」が「伊(国)の都」の意味だとすれば、国名は「伊」である。「委奴」も同じである。
「委(国)の都」の意味となる。つまり、「委」が国名である。

九州に来た呉の王家初代の王「忌」は一字名の国号を使用した。「姫（忌）国」である。二代目の「順」も吉野ヶ里に建国した国に一字名を使用したと考えることができる。「委国」である。

漢への朝賀使は、自国を「委（い）」と名乗った。「委（い）」と「倭（ゐ）」の音にはそれほどの違いはない。漢人が「委」を「倭」と書いた。不思議はない。
漢人は「委国」を「倭国」と表記し、「委人」を「倭人」と表記した。だが、「委」と「倭」では漢字のもつ意味が異なる。「委人」「委国」の方が良い。よりふさわしい文字としては、「伊人」「伊国」であろう。或いは「委」は「井」かも知れない。「井」の姓の人は熊本市に多い。

「伊」「井」を使った地名、人名は「伊予」「紀伊」「伊達」「伊丹」「伊原」「伊勢」「伊賀」「伊豆」「井村」「井口」「井龍」「井川」「井山」「井伊」等、多く現代に伝わる。卑弥呼の跡を継いだ「壱與」は、古事記では「伊豫」である。

漢への朝賀使の国は吉野ヶ里を都とした「伊国」だったと考える。「伊国」とは佐賀県である。国名は「伊」、その首都は「伊都」。これが、一世紀、漢が認識していた「倭国」である。

「邪摩惟」

三世紀、陳寿は「郡より倭に至るには」と、『倭人伝』旅程を書き始めている。陳寿が認識している「倭」は、もはや、「伊国（吉野ヶ里）」に留まらない。

陳寿が認識していた「倭」とは、「狗邪韓国」から「投馬国」に至る３０国である。その中の２２国には王が居た。王は「呉」の王家と「楚」の王家である。「姫氏」と「熊氏」の二つの王家は紀元前五世紀の「呉」「楚」に遡る。
陳寿は２２国、それぞれの王国の名を借字で次のように書いた。
「斯馬国」「己百支国」「伊邪国」「都支国」「弥奴国」「好古都国」「不呼国」「姐奴国」「対蘇国」「蘇奴国」「呼邑国」「華奴蘇奴国」「鬼国」「為吾国」「鬼奴国」「邪馬国」「躬臣国」「巴利国」「支惟国」「鳥奴国」「奴国」「狗奴国」である。

日本語に変換できる国名は、「斯馬＝島」、「鬼＝姫」、「邪馬＝山」、「鳥奴＝宇土」、「奴＝土」である。他に、「弥奴国」は「水戸国」、「巴利国」は「針国」と読めるかも知れないが確証はない。
「島国」は福岡県みやま市である。この国は3世紀群島だった。それが国名の由来である。
「姫国」は熊本県菊池郡に存在した最古の国である。今名「菊池」とは「姫口」であろう。
「山国」は熊本市中央区である。「山」とは恐らく「阿蘇山」を指す。『隋書』に「阿蘇山」が紹介されている。「山国」の人々は、この火山を「阿蘇山」と呼んでいたことが分かる。「阿氏と蘇氏の聖なる山」が「山国」の国名由来となった。
「宇土国」はそのまま熊本県宇土市である。宇土市は今日まで『倭人伝』の「鳥奴（ウト）」をそのまま伝えている希有な例である。
「土国」は宇土市の隣、宇城市であろう。その境の国、「狗奴国」は八代市となる。

陳寿は２２の総ての国名を書いている。そして、この２２国が連邦制国家だったと認識していたように思える。陳寿記事の中にはそれを示唆するものがある。「共立一女子為王名曰卑弥呼」である。「（２２国の王が）一人の女子を共立して、王（連邦の王として）と為す」と読む。或いは、范曄も「其大倭王居邪馬台国」と書いている。「大倭王」とは「王の中の王」の意である。「２２人の倭王の中の王が大倭王」と読む。これらは倭国が２２国の連邦国家であることを示している。

倭国は２２国の連邦国家として存在していた。当然、その連邦名もあった。

だが、南宋刊本『倭人伝』には連邦名はない。南宋刊本は、「南至邪馬壱国女王之所都」となっている。この「邪馬壱国」は連邦名ではない。そして、陳寿は「邪馬壱国」と書いたはずはない。この名が生まれたのは宋代である。

陳寿は「倭国は連邦国家である」と認識していた。当然、連邦名も知っていた。陳寿は、『倭人伝』に連邦名を書いていた。こう考えるのが筋であろう。では、何と書いていたか。
今、『後漢書倭伝』『御覧魏志倭人伝』『南宋刊本倭人伝』を読むことができる。これらの本に示された名は「邪馬台国」と「邪馬壱国」である。これらは連邦名ではない。

私たちには正史以外に連邦国家の名前を知る手段はないが、その名を私たちに伝えてくれた人が居る。唐の皇太子、李賢である。
李賢は、『後漢書』「邪馬台国」に「今名邪摩惟」と注釈した。
「今名」とは「今、人々が使用している名」の意味である。では、どこの国の人か？「唐人」か「倭人」か？つまり、「邪摩惟」は中国語か、それとも、日本語か？
「邪摩惟」という表記は借字である。従って、「邪」にも「摩」にも「惟」にも本来中国漢字が持つ意味は無い。もし、中国語であれば、このような漢字は使わない。
「邪摩惟は倭国の人が使っている今の名である」と、「邪摩惟」は日本語として読むべきである。

今、倭国の人々は「邪馬台国」とは言っていない。「邪摩惟」と言っている。

「邪摩惟」は日本語である。だとすると、「邪馬惟」は私たちがよく知る日本語として理解できるはずである。しかも、文字ではなく、「音」を聞いて、日本語として理解できるはずである。
「邪摩惟」の日本語「音」とは何か？「邪馬」は「やま」、「惟」は「ゆい」である。どちらも耳で聞いて意味が掴める。現代漢字で表すとわかりやすい。「やま」は「山」、「ゆい」は「結」である。「山」も「結」も、私たちに容易に理解できる日本語である。
李賢はここに初めて日本人が使っていた日本語の連邦名を紹介した。
「邪摩惟」、つまり、「山結」。これが陳寿が知っていて、『倭人伝』に書いたと思われる日本語の連邦名である。

「邪靡堆」

「邪摩惟」に関しては異論があり、それが主流である。「惟は堆の誤刻」というものである。唐は『魏志』「邪馬台」を「邪靡堆」に変更している。従って、唐における「今名」は「邪靡堆」である。唐に「今名邪靡堆」はあっても、「今名邪摩惟」はない。故、「誤刻」となる。
他の史料においても「今名邪靡堆」とするものがあり、それが「誤刻」の根拠となっている。

だが、この問題の本質はそこではない。本質は「邪靡堆」を「ヤマト」と読むところにある。つまり、「今名邪靡堆」は「今名ヤマト」、「邪靡堆」は日本語「ヤマト」だと主張する。

唐代、我が国の今の名は「邪靡堆（ヤマト）」である。

「今名邪摩惟」は「今名ヤマト」とは読めない。「惟」は「ト」の音にはならない。「邪摩惟は誤刻」とされる真の理由はここにある。
こうして「邪摩惟」は「邪靡堆」となり、「邪靡堆」は「ヤマト」となり、「邪馬台国」も「ヤマト」となる。

「堆」「台」は日本語「ヤマト」の「ト」の音の借字だ。
唐の時代、我が国の名は「ヤマト」である。

ほぼ全ての研究者はこのように主張する。こうして、「邪馬台」も「邪靡堆」も日本語「ヤマト」と

なる。確かに、隋の時代から唐の時代には、我が国からの遣隋使、遣唐使が中国を訪れ、我が国に対する認識も格段に深化している。隋、唐が「ヤマト」を知ったとしても不思議はない。

「邪靡堆」は「ヤマト」という日本語なのか？
『隋書』「倭国伝」は無論漢語で書かれている。総ての漢字一つひとつに意味がある。ところが意味の無い漢字も使われている。「借字」と言われるもので、日本語の音を漢字にしたものである。現代日本語でも、「ニューヨーク市」「シドニー港」「ゴビ砂漠」と表記する時、カタカナは外国語である。
正史「倭国伝」においては、「借字」は日本語である。「借字かどうか」の見分け方は、その一つの漢字に中国語本来の意味があるかないか、である。意味が無ければ借字である。
陳寿は22の国名を書いている。国名は、無論、日本語である。よって「借字」を用いた。「斯馬国」の「斯」「馬」は借字である。「斯（シ）」「馬（マ）」に漢字の持つ意味は無い。「斯馬」は「島」の借字だからである。

『隋書』「倭国伝」の借字はそれほど多くない。
国名：「倭国」「邪靡堆」「邪馬台」「倭奴国」「都斯麻国」「一支国」「竹斯国」「秦国」
人名：「卑弥呼」「多利思北弧」「阿輩雞弥」「利歌弥多弗利」

「邪靡堆」と「邪馬台」は次の文中に現れる。
　　都於邪靡堆則魏志邪馬台者也
　　都を邪靡堆、即ち、魏志の邪馬台である。

「邪靡」「邪馬」の「邪」「靡」「馬」に中国語の意味は無い。「邪靡」「邪馬」は日本語である。では「堆」と「台」はどうか。この漢字は意味の無い借字か、それとも、意味ある中国語か？

有名な青銅器文明の「三星堆」遺跡がある。その名は「三つの土盛りがオリオン星のように並んでいた」ことに由来すると言われる。この「堆」は「盛り土」の意味を持つ中国語である。
「邪靡堆」の「堆」は、「三星堆」と同じ用法で、「盛り土」の意味を持っている。もし、「ト」音の借字を使うとしたなら、それ自体の意味は無い、例えば、「登」「徒」「吐」等を使うであろう。
「邪靡堆」は「邪靡」は日本語。「堆」は本来の意味を持つ中国語である。

「台」に関してはすでに多くの研究が為されている。「台」には多くの意味があるが、「中央官庁」「宮殿」の意味を持つ中国語である。「陵雲台」「九華台」の「台」は「宮殿」を指す。
「邪馬台」は「大倭王」の都の名として使われている。「台」は「宮殿」の意味をもつ中国語である。「邪馬」は日本語であるが、「邪馬台」は中国語である。
「邪靡堆」「邪馬台」は中国語である。日本語「ヤマト」にはなり得ない。

「邪馬台」

范曄は「其大倭王居邪馬台国」と書いた。「邪馬台」は「大倭王の首都」に対する中国語である。この「台」には「王宮」「首都」の意味がある。
「台」の使用法は、日本語の「京」と似ている。日本では、「平城京」「藤原京」「長岡京」「恭仁京」等、都を表す際、「京」を使う。私たちは「京」だけで都をイメージできる。南朝劉宋の人々にとっては、「台」だけで首都をイメージしたのであろう。
「邪馬台」を日本語的に翻訳すると、「邪馬京」がふさわしい。

「台」は中国語である。それはそれでいいとして、では何故、「邪馬台」としたのか。「邪馬」は「ヤマ」という日本語である。
南朝劉宋は倭国首都に対して「倭台」としなかった。「倭国の首都」だから、「倭台」という呼

称が自然である。もし、南朝劉宋が「倭台」と書いていれば、是を「ヤマト」と読むこともなかったと思われる。
しかし、「邪馬台」である。「ヤマ」に続いて「台」を「ト」と読む。「邪馬台」は「ヤマト」という日本語になる。「日本の首都はヤマトの他にはない」と考える人にとっては当然の読みであろう。

なぜ、ここに「邪馬(ヤマ)」という日本語が使われたのであろうか？
南朝劉宋が首都名を「邪馬台」としたのは、劉宋の倭国の首都認識が具体的だったからである。

倭国の首都は「邪馬」と呼ばれる国に存在する。
首都はその「邪馬国」の高台にある。

「邪馬」は日本語「山」である。そして、大事なことは、「山が国名である」という点にある。陳寿が「邪馬国」と書いたその国である。「邪馬台」の「邪馬(ヤマ)」は国名なのである。
「邪馬台」とは「山国にある台」という意味を表す首都名である。
「邪馬台」は首都名、現代では「東京」と同じである。だから、范曄は「其大倭王居邪馬台国」と作らず、「其大倭王居邪馬台」と作る方が的確だったのである。『隋書』は「魏志邪馬台」としている。

ところが、范曄は「邪馬台国」と作った。首都名に「国」という一字を付けて、「邪馬台国」としたため、「邪馬台」が首都名から国名と変化した。「東京国」としたようなものである。「東京国」はない。だから、「東京を首都とする国」と読まなければならない。「邪馬台国」も同じである。
「邪馬台国」は「邪馬台を首都とする国」と読まなければならない。

南朝劉宋の使者は「邪馬国(熊本市中央区)」の高台(京町)に存在する大倭王の都を訪れた。その見聞によって、都の名を「邪馬台」と作った。
奇しくも、「邪馬台」は「中央区京町」である。中国語「台」と日本語「京」が偶然一致する。
もし、范曄の「其大倭王居邪馬台国」を日本の読者に分かりやすく翻訳するとすれば、「邪馬台」は「山京」と翻訳する。「倭国連邦の大王は山京に居る」となる。

「山結」

再び、李賢に戻ろう。李賢注「今名邪摩惟」は我が国の連邦国家の名前である。私たちは、この注によって、連邦は日本語の名前を持ち、その名は「山結(ヤマユイ)」であることを知ることができた。
「結」は「結集」を意味する日本語。国の形である連邦を表している。
「山」は無論「山」であるが、国名である。連邦首都が存在する国が「山国」と呼ばれる国だった。現代でも「山」を使った「山梨県」「山口県」「山形県」「岡山県」等々の県があるが、それと同じである。
首都がある「山国」を中心として連邦が形成された。よって、連邦を「山国を中心とした結＝山結」と呼んだ。「山結」が我が国の人々が使っていた日本語連邦名である。
２２人の王の国の支配下に「狗邪韓国」「対海国」「一大国」「末盧国」「伊都国」「奴国」「不弥国」「投馬国」の８国が存在した。この３０国が「山結」である。

この「山結」という日本語国名は、正史には登場しない。
唐の李賢だけが、「倭国の人々は、邪馬台ではなく、山結と言っている」と、書き残した。
七世紀の李賢の時代に、「山結」は存在していた。さらに、遡って、三世紀の陳寿の時代にすでに、この連邦は結成されていた。陳寿はこの連邦名を知っていた。
「山結」が終焉を迎えたのは、白村江の戦いに完敗し、壬申の乱の敗北によって「日本国天皇家」が終焉を迎えた時である。二つの国は運命を共にした。

日本語国名と中国語国名

「倭国」とは「狗邪韓国」から「投馬国」までの３０国の連邦国家を言う。ここで、「倭国」に対する日本語国名と中国語国名を区別して整理しておこう。

(1) ３世紀、西晋陳寿は『倭人伝』で倭国名を「邪馬惟」と書いていたと思われる。
「邪馬惟」とは、連邦国家を意味する日本語「山結」である。

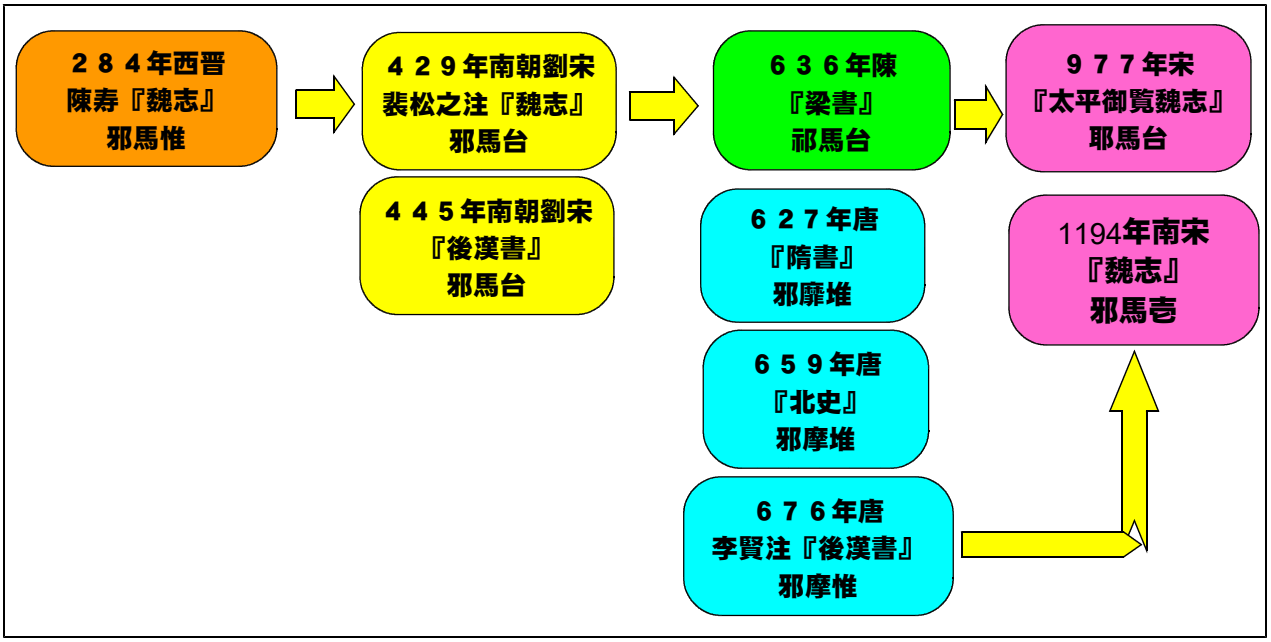
(2) ５世紀、『後漢書』「邪馬台」は南朝劉宋が作った中国語の倭国首都名である。
中国語「台」は日本語の「京」に通じる。「邪馬台」は「邪馬京」と表記した方が私たちにはピタリとくる。倭国の「京」は「邪馬国」にあった。

(3) ５世紀、裴松之は『倭人伝』を注記する際、倭国首都名を「邪馬台」とした。以後『倭人伝』の倭国首都名は「邪馬台」となった。

(4) ７世紀、唐は「邪馬台」を「邪靡堆」と書き換えた。「邪靡堆」は日本語「ヤマト」ではない。中国語である。

(5) ７世紀、陳『梁書』「邪馬台」は裴松之注『倭人伝』の引用であろう。

(6) ７世紀、唐李賢注『後漢書』「邪摩惟」は倭人自称の連邦国家名、日本語「山結」である。

(7) １０世紀、宋『太平御覧魏志倭人伝』では「邪馬台」である。この『倭人伝』は裴松之注記『魏志倭人伝』の所引であろう。

(8) １２世紀、南宋『倭人伝』「邪馬壹」は南宋が作った倭国名である。「壹」は「台」の誤刻ではない。南宋は承知の上で「壹」と作った。その根拠となったのは、唐李賢注の「邪摩惟」であろう。「惟」を「イ」と読んで、「邪馬壹（ヤマイ）」とした。